〈青森県史〉の窓 67

# 修学旅行の歴史を考える！

中園 裕
（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

日本で最初の修学旅行は、1886（明治19）年に東京師範学校が実施した「長徒遠足」である。当時の修学旅行は発火演習を目的とするなど、富国強兵策に基づいた行軍的要素が強かった。その後、日清・日露戦争を経て満州や韓国への修学旅行が増えた。子どもたちに、植民地を持つ帝国臣民としての自覚を持たせる目的があったからだろう。

満州事変以降の修学旅行は、体力増強のため神宮参拝や登山が奨励され、健民運動的な色彩を強めた。しかし太平洋戦争以降、軍事輸送を優先するため旅行自体が制限され、敗戦前には修学旅行も中止となる。総じて戦前までの修学旅行は、帝国臣民の養成を意図し、軍事演習と健民運動の間を揺れ動いていたといえよう。

敗戦後の1946（昭和21）年、修学旅行は食糧持参で復活する。しかし、列車や旅館の状態は劣悪で、食中毒や交通事故が多発した。親の経済的負担から旅行に行けない子どもたちも多かった。そこへ宇高連絡船「紫雲丸」が遭難。修学旅行生100人余りが死亡する事故が起き、全国的に修学旅行を忌避する傾向が強まった。

それでも国は修学旅行協議会を設置し、大いに旅行を推進した。体験学習や集団行動による心身の訓練を重視したからだ。敗戦後の修学旅行は、戦時中の抑圧から子どもたちを解放し、同時に経済復興のため集団行動の重要性を身につける目的で奨励された。この時代に生きた青森県の子どもたちは、後に東京などへ集団就職している。彼ら多くの青森県出身中学生たちが、日本の高度経済成長を支えた側面に注意したい。

三戸小学校では、1949（昭和24）年から修学旅行が始まり、5年後には6年生による青森・浅虫への1泊2日旅行が定着する（現在は函館へ1泊2日）。子どもたちは、初日に浅虫の海上を遊覧して水族館を訪問。旅館に1泊した翌日、県庁や議事堂、図書館や公園の他、東奥日報社や菓子工場、そして青函連絡船などを見学している。

高度経済成長期に入り修学旅行専用列車が登場する。自動車社会が到来する前だったため、修学旅行は鉄道やバスの需要を増やし走行網を拡充させた。修学旅行の経験が忘れられず、結婚前の女性が観光旅行する傾向を強めたのも、ちょうどこの頃だ。

1970年代以降、新幹線が各地に開通。旅行先が全国各地へと広がった。日本の国際化や飛行機の発達に伴い、海外への修学旅行も増加する。大都市の娯楽施設、雪国でのスキー、南国の離島など、旅先も多様化し高級志向が強まっていった。

その反面、自動車社会の到来で、育児時代から遠方旅行を経験し、旅行自体に魅力を感じない子どもたちが増えている。実際に修学旅行自体を取りやめる学校も出てきている。

とはいえ、集団行動を伴う修学旅行は、人間関係を習得できる特別な時間である。子どもの成長過程で一定の集団行動が必要との意見も根強い。修学旅行は子供の教育をどう考えるかという大きな視点で論じねばならないと思う。

青函連絡船に乗船し笑顔を見せる子どもたち
1957（昭和32）年9月6日・三戸町立三戸小学校所蔵